

女性が活躍できるまちづくり



安来市長
田中 武夫

マザーズコーチング
スクール認定
シニアティーチャー
福田 紘子

トキワホールディングス
株式会社
代表取締役社長
白尾 卓也

合同会社 子どもベース
代表
佐伯 絵美

社会医療法人 昌林会
経営企画部経営企画課長
津村 美子



安来市では、市民の皆さんが安心して子どもを産み・育てられる環境づくりへの取り組みの強化や、女性の視点を反映させた施策や事業の展開による女性の定着が緊急かつ重要な課題となっています。

新春座談会では、女性の社会進出について包括連携協定を締結している企業、保育コンサルタントとして起業した女性事業者、子育て世代のサポーター、女性の活躍しやすい職場づくりに取り組んでいる企業の担当者を招き、安来市長と「女性が活躍できるまちづくり」について語り合ってもらいました。

 **安来の魅力を改めて知ってほしい**

田中市長（以下、市長） 本題に入る前に、皆さんのそれぞれの視点から見た安来市のポテンシャルや魅力はどんなものがあると思われませんか。

白尾卓也（以下、白尾） 私は県外の者なんですけど、安来と聞くと安来節とか足立美術館がすぐ思い浮かびます。なかなかこれだけ全国的知名度がある伝統芸能や観光名所といった武器がある地方自治体は少ないと思います。また、JRの特急が止まり、空港も車で40分圏内に2カ所もあるので非常に訪問しやすいです。さらに隣の米子市や松江市に行けば買い物もできるなど、地元の皆さんは安来市の魅力をもっと知ってほしいなと感じています。

佐伯絵美（以下、佐伯） 私は保育コンサルタントとしてさまざまな地域に出かけてお仕事をしています。そのため車、電車、飛行機等、さまざまな交通手段で毎週どこかに出かけています。白尾さんがおっしゃったように空港が近くにあつて、特急が止まってくれて、すぐに高速道路に乗れることは、すごくありがたいことです。また、外から帰ってきたからこそ、この



佐伯 絵美

地元や東京の保育現場での勤務を経て、安来市にUターン。保育現場を支える組織の必要性を感じ、安来市にIターンした元同僚とともに令和3年2月に安来市で保育コンサルティングの会社を設立。安来市を拠点に全国の保育現場を対象にコンサルティングを展開している。

土地の良さを改めて実感するところがあります。先日も保育者向けの研修で使う木片を近所の大工さんをお願いしたら、想像を超えるクオリティの高い積み木に加工してくださり感動しました。協力してくださる、温かい人が地域のあちこちにいることも安来市の魅力だと思います。

並ぶ商品を作る手仕事をされる人たちがいらつしゃったり。安来には誇るべき文化や歴史、人々が《日常に在る》ことで、ふと関心が外に向きがちになることも。とは言え、誇るべきところや更に魅力を再発見するところは、安来のポテンシャルを知る一歩でもある気がします。

私たちは、安来から出ること、都会に行くことが良いと親からも勧められて育ってきたようなところがありませんがその頃と違って、これが今の時代に合った安来市のポテンシャルなのかなって感じました。

とも言われました。それが、地元の人が安来市の魅力に気づいていない原因なのかもしれないね。



津村 美子

経営企画課長を務める社会医療法人昌林会が島根県の「しまね女性の活躍応援企業」、「プレミアムこっころカンパニー」の認定を受け、女性の活躍しやすい職場づくりに取り組む。特に優れた取り組みを実施しているプレミアムこっころカンパニーとして島根県から2度の表彰を受ける。

女性の活躍のために コミュニケーションを

市長 女性が活躍するにはまず活躍の場の一つである仕事が必要と思ひ、現在安来市では、女性はもちろん、地元学生、Uターン者の就職の選択肢を広げるため、ソフト産業を中心とした企業誘致を推進しています。交通の便が良いという話がありました。山陰道スマートインターチェンジ設置に向けた具体的な準備も始まり、交通インフラがさらに良くなると予想され

福田紘子（以下、福田）

来には《何かをやりたい》という人が多く、過去に数名で「Hug組」という団体を立ち上げイベントを開催しました。その中で私たちは、安来の魅力をまずは自分たちが知ることを始めたんです。例えば、月の輪神事の伝統や、安来節や安来の歴史。また、布部には百貨店に

津村美子（以下、津村）

市長 昨年、安来市出身で国の機関の要職に就き活躍されている人に安来市の魅力を聞いたことがあったんですが、安来には全てがあると云われたんですよ。自然は豊かで海も山もあり、弥生時代から続く歴史的に価値のある遺跡や全国の名所よりも古い歴史を持つ神社仏閣もある。鉄の積出港として栄えたことから始まる産業もある。でも、それが生かされてい



福田 紘子

サロン業とともにシニアティーチャーとなり、子どもや親子の孤独・孤立解消に向けた活動を始める。子育て中の2児の母。

※シニアティーチャーとは、子ども達の孤独をなくし安心感を育むために、子どもにとって1番身近な大人達にコーチングを伝える講師「マザーズティーチャー」のサポートをするリーダー的なマザーズティーチャーのこと。

ますので、進出を考えている企業には安来を選んでいただけるものと期待しています。また、昨年は商業ビルの一室を借り上げ「やさぎおためしサテライトオフィス」を開設しました。3月には誘致したIT企業に入居してもらい、地元の人を雇用してもらおう予定です。また、地元企業がLocaco（ロカコ）という地域情報プラットフォームアプリを開発し、Locacoに登録された地域店舗の広告などの作成を、女性が在宅で子育てしながらできるロカコマという仕組みもスタートされています。皆さんの視点で、安来で女性が活躍するためには何が必要だと思いますか。

佐伯 保育の観点から考えるとまず子育てがしやすいまちづくりが必須だと思います。母親が安心して社会に出て行くために



白尾 卓也

自社のミッションの一つ、「日本の小規模市町村の活性化こそが日本の持続的な発展につながる」に沿って、人口5万人以下の自治体の地方創生、女性活躍推進や働き方改革等に取り組んでいる。安来市とは、令和4年8月に包括連携協定を締結し、課題解決に向けて協働で事業を展開。

は、子どもが安心して「園」という家庭とは異なる社会での生活をしたいけることが必須だと。そのためにはも全ての子ど

田中 武夫

令和2年10月から市長となり、現在1期目。就任時から行財政改革に取り組むとともに、高校魅力化推進による地域の将来を担う人材の育成や、女性や地元学生、UIターン者等に対する新たな雇用創出のため、IT企業など様々な業種の立地促進にも取り組む。

もが一人の人間として尊重され、この町から、あるいは社会から必要とされていると実感できるような保育を充実させることが必要だと感じています。周りにいる大人が「思い」も含めた子どもの声に耳を傾け、子ども一人一人がそれぞれの興味・関心を探求し、違った良さを出し合いながら生活・遊びに向かえるような保育が重要だと考えています。更に、そうした幼少期からの遊びや生活を通して、この安来の地域資源や人に触れることが、郷土愛や地域の人へのリスペクトにも繋がるのではないかと感じます。また、福田さんが行っている親が孤立しない取り組みも重要だと思います





す。昔は地域の中で助け合いながら子育てをすることが当たり前前の時代があり、悩み事があったら相談のつてももらい安心感をもらせるようなネットワークが地域にありましたが、今はそれが都市部も地方も希薄になっています。家族以外で気軽にながれるようなネットワーク、あるいは仕組みがこの安来に必要なのではないかと思います。

福田 佐伯さんの「全ての子どもが一人の人間として尊重される」という話から、私たち大人が尊重や敬意を払うことが「もしかしたらできていないつもりになってないかな」と改めて考えてみるのも大切だと思えました。コミュニケーションとは、

自分と相手の違いをお互いが理解してそれを埋め合う作業だと教わったことがあります。安来は自分も相手も大事にしながら、自分の夢を実現できるまちなんだよと誰もが心から言える機会が増えるると本当に素晴らしいと思います。例えば、子どもに携わる大人が改めてコミュニケーションを学ぶ場づくり等は、佐伯さんのお話を更に色鮮やかにするんじゃないかなと思います。

市長 コミュニケーションが希薄になったのは核家族が増えたことも大きな原因の一つかなと思いますね。昔は同居の祖父母や地域の大人とのコミュニケーションから親も子もさまざまなことを学んでいましたので、そのような環境の充実は必要だと思います。今それを補う手段として放課後児童クラブの活動支援に力を入れています。世代間交流や、地元の職人さんを招いての体験交流など、地域の協力をいただいで子どもたちに多くの学びを体験してもらっています。また、高校魅力推進事業の中で高校生に地域の活動に参画してもらったり、地域の課題解決のために取り組んでもらったりしています。その活動の中で生まれる地域の人とのコミュニ

ニケーションを通じて郷土愛を育み、地域に根差す人材になってもらいたいと思っています。

女性も男性も 対等な立場、条件で

津村 私には子どもが3人いて、母親としての面と働く者としての面のそれぞれの思いがあります。子どものことで仕事を休まないといけない、職場の人に迷惑をかけて心苦しくなることが誰でもあるとも思いますが、私の職場は医療・介護・福祉分野なんです、子どものことで急に休むことになっても、柔軟な対応をいただいています。すし、事業所としてもフォローできる環境を整えています。また、家庭の事情でフルタイムで働けない人もいますので、できるだけ職員の事情を考慮した勤務体系にしています。パートタイム勤務にしても一律で勤務時間帯が決まっているわけではなく、事情を聞き、勤務時間を区切ったりしています。今はやはりライフスタイルが多様化していて、そのライフスタイルに合わせて働けるような雇用体制にしないと、働く人材も集まらなくなっているところもあります。さらに女性だから、男性だからとかの意識を持たないこと

も重要だと感じていて、女性も男性も働きやすい職場にしたいかなと、女性の活躍にもならないというか、みんながそういった意識を持って進んでいくということが大事だと実感しています。また、安来にいるとどんな仕事に就けてどんな生活ができるのか子どもたちにイメージしてもらおう機会が増えるといくと感じています。そこを行政と民間が一緒になって取り組めるとまた変わってくるかなと思います。

市長 おっしゃるとおりで、安来にどんな企業があつて、どんな思いで仕事をしているか知らない子どもたちが多く感じます。そのため、安来の企業ガイドブックを作成し、移住・



ジェンダーギャップ指数とは

世界経済フォーラムが公表する世界各国の男女平等の度合いを経済・教育・健康・政治の分野から数値化したもの

「1」が男女完全平等で「0」に近い数値になるほど不平等であることを表す。

2023年国別ランキングでは、1位のアイスランドの「0.912」に対し、日本は「0.647」と146カ国中125位と過去最低の順位(2022年は116位)となった。

日本は教育(0.997)と健康(0.973)は世界トップクラスなのに対し、政治参画(0.057)と経済参画(0.561)は他国と比べて著しく低い。

定住や就職のセミナー会場で配布しました。また、安来にサテライトキャンパスがある島根県立大学と協働で高大連携型キャリア教育プログラムを実施しています。これは、地元の高校生が「仕事のつながり」から「社会のひろがり」を学び、自分の未来と地域の未来を同時に考える講座で、地元企業で働く社会人から、その仕事を選んだ理由ややりがいなどについて対話するプログラムもあります。このような取り組みがさらに広がると思います。

白尾 女性活躍というところで大学と一緒に研究したり、自治体と協働で取り組んだりしています。安来市に限らず、全国に共通する部分ですが、女性が活躍して働くために必要なものはやはり行政と企業と家庭、その3つのどれが欠けても駄目だと思つてます。その中で一番日本が弱いのが家庭の部分で、日本は無意識の偏見があるとすごく感じています。育児だったり介護だったり色んなものを女性が担っている現状が日本では当たり前になつている。外国に比べて夫婦間でのコミュニケーションが足りないし、特に男性のサポートが足りないと思つてます。それを言うと言われれば、そうじゃないかと言われることがあります。そうじゃない。世界と比べて日本は女性の方が地位が低いんです。はっきり言つて。

市長 国別のジェンダーギャップ指数(左の欄参照)が毎年公表されていますが、日本の順位は下から数えた方が早く、主要先進国(G7)の中でも断トツの最下位ですよ。

白尾 そうなんです。男女共同参画とは、基本的に同じ境遇下で、自分の能力を発揮したい人が発揮できることであつて、日本はそこがまだまだできていない。その意識すらまだ追いついてない状態です。まずその意識改革を安来市のような規模の自治体から取り組んでいく。女性たちの力を結集して、何かいい施策を考えてそれを推進していくのも一つの方法かなと思つています。

市長 意識改革にはまず市役所の職員からと考え、令和3年8月に私自ら「イクボス宣言」をしました。職員のワーク・ライフ・バランスを考慮して、全ての職員が育児や介護、地域活動に積極的に参加できるように取り組むと同時に、市内の企業等に「イクボス」の取り組みと精神を広げることが目的です。私だけで市役所がまわつてるわけでも、市役所だけで安来がまわつていけるわけでもありません。企業や地域、学校など「オールやすぎ」で意識改革を始めとした女性が活躍できるまちづくりにも取り組んでいく必要があります。

白尾 意識改革にしても行政の取り組みには特効薬はなくて、地道にやつていくしかない。ソフト産業誘致も一朝一夕でできるもんじゃない。しっかりと分析して安来市だからこその、最初に話した地の利を生かした施策を一步一步進めていくしかないです。

